



新編水滸畫傳

三編

八

875
28



長崎 栄次 郎

875
281

あゆみのたより
神書佛書醫書國史
繪本平本新古賣買
幸遊いふく法行の例
河津文了江上
西尾 依後町三休橋中入
又方屋孫云衛

新編水許画 傳卷之貳拾八

東武 高井蘭山翁

譯編

明治三十七年
七月十日
購

張如監血鸳鸯樓小濺

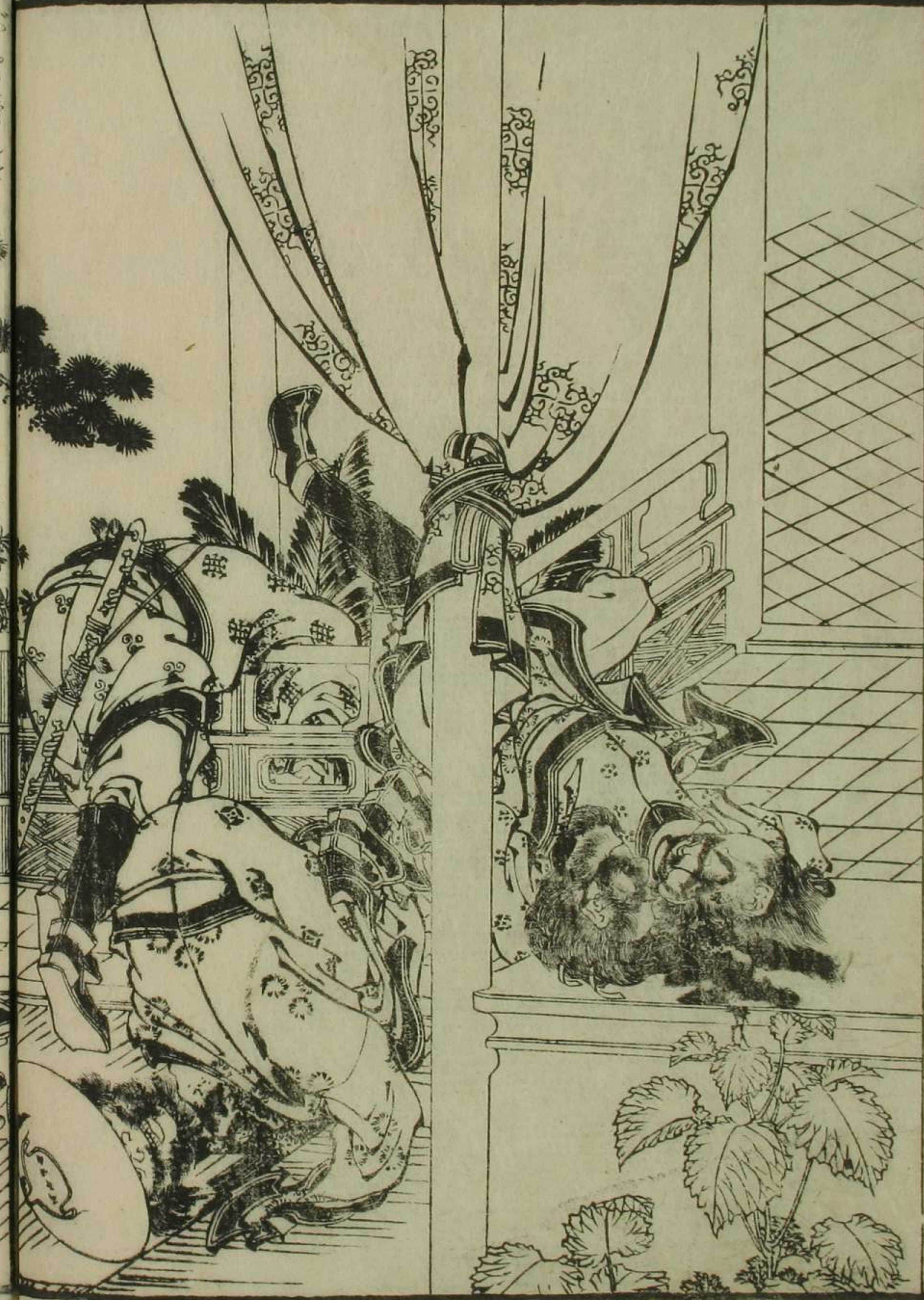
武松ハ已ニ鴛鴦樓の様子と半を上げて張如監張奎練蔣門神等
後話と夢をぬし今跳蕩り皆くと折て棄んと心焦燥と推懐へるが各の
云ふと一々能く認められ右のさふ刀と持たの白小巻と握り緊め様子
と上りて樓上小座れ我老早社小立て汝ホが後話一々夢とるぞといひ
れば蔣門神先武松と見て愕然肝も魂も九霄の雲外子散彈身癡
纏も恰も車中風の巻一さぐぐと捲れども以者原来有名の力士なれば
急小座と起て拵扎んとせし不小武松虎の威を奮富小我汝と免し
地に隠れ居へ忽ち現出穀さんと喚く力付るを羽に捲くぬ余と見へ汝が

乾小任まるぞと只一刀小斬倒し。まゝ身を回して。張劔監小斬て。薙りし。はハ
しくこれに迎へんとせし。武松電の如く跳入て眉間を剝奪られ。遂に樓
板の上に倒れり。張劔練ハ本武夫の家小せられ。酒後と只尚磨
小力の覚えわり。傍小ゆる椅子とて。武松小あて。薙りし。如に。武松勢ひ小
糸ト唯一推おられ。何れか。怒り。忽ち地上に倒れし。武松あて
水もあらず。遂に刃と剝落し。蔣の神が。刃も剝んとせし。如に。初刀凌傷を
り。又再び立起り。拵れんとせし。武松六小怒り。忽ち右の脚と薙て
席上小踢倒し。刀と奪て。刃と剝強劔監が。例に。立勢拵れ。何の恨も
我と欺さる。や我今汝が腹と剔。又六腑と剝出し。一く怨と盡せられ。も
衆の軍んと厭ふ。小ぞ。格別の慈悲と盡て。唯頸と剝せ。と。忽ち。薙せ。武松
盃盤の狼藉中より。一ツの盃と擇み。自ら酒と篩。二連に。三盃盃飲

乾し。再び強劔監が。屍首の赤小ゆる衣の襟と。杜断刺れ。血に蘸し。白
壁の上にハツの大文字と書て。云殺人者赤虎武松也。と。終小書罷り。如
小樓下小夫人の。声と覚えて。咄せり。云。る。小樓上の。噪し。ま。定て。眞主。碎の
ての事。を。ん。誰。小。ても。お。く。樓に。登て。扶けを。せ。よ。と。あ。な。も。終。り。小。夫人
の。漢子。を。小樓。と。上り。あり。られ。武松。糸に。身と。薙し。これ。と。ろに。け。あ。人の。ま。ハ
張劔。監。が。腹。の。家。人。と。て。第。日。後。園。の。内。に。於て。武松。を。捕。し。お。され。武松
暗に。悦んで。扱へ。居。り。り。る。如に。かの。夫人。席上。小。あり。る。に。三人。の。屍首。血。泊。の
内に。撲。て。お。られ。大小。醫。を。面と。観。合。せ。唯。果。れ。果。る。海。と。て。敢。て。お。す。も
做。ら。ぬ。小。身。を。回。さんと。せし。如小武松。躍り。出。て。只。一刀。以。一人。を。斬。倒。し。られ。は
彼一人。ハ。忽ち。地上。に。お。伏し。一。命。と。鏡。し。更。と。薙。り。に。涙。を。流。し。り。武松。是
と。見て。呵。くと。大。小。笑。て。云。ら。る。ハ。我。汝。を。鏡。し。が。に。寫。し。く。死。を。後。せ。と。遂。に。頭

と別落しぬ武松熟睡ひるハ張小も一不做二不休すと言ふに我何ぞ思
はぬ人殺し歩休んや殺ひ千百人を殺すも早死一死するの事こそ毎ひ刀
を掲げて樓を下りられん夫人恨み武松を家人と思ひん乃ち官に云はるは樓上
何ゆゑかくのぞく強動せよと殺未だ云もろらるに武松房間の希小即ち六
夫人は漢子を見て大小驚き汝ハ誰れ我が家小来りぞ武松云汝我を
忘れろやと遂に刀を揮つて改と別落し於再三左右を顧るに彼張豹監
軍の使女玉榮房間の内より燧燭を掲げて出らる夫人が斬れと見て忽
ち眼を眩し倒れんとせし如に武松も馳來り遂に胃の上と二刀刺て押伏せ
り乃ち如又二人の男女出られ武松是をも斬殺し乃ち四方八面を搜し經て
二十餘人せり倒し今ハ心地よくと悦び遂に後門と馳出る城下にあり今宵
迷小城を越て城外小逃出しとて於て城門の辺小来て伺ひ見るに城門せちり

軍卒未だ多く熟睡して更に拘りなると武松公解ふ背後の方より銃
出急に城門の上に乗せて下とぞ見んは城東小城より城門も又大い
なる低るれ武松平生の術を盡し足を縮め身を躍らして只一跳小飛下り
於て一陣の橋とぞりて幾く小二十歩行り如に三更の鐘は方小雲
きて耳に裏さぬ武松東の小橋とぞりて一時走り馳しうば又早く又更の鐘
なりけり武松終夜辛苦して身疲れると且駕に歩れり二十枚の棒の
痕再び登りて大に痛まれ武松髪に勝がく髪を憩えんと欲して前面
とぞ見ん樹林の内小一の古廟あり武松幸ひなる事と悦んで遂に廟
中に入睡し如し傍より口人の漢子現れ出鉤索を以て武松を搭住於て
も小に締め引起しられ武松漸く睡りて醒し大小驚き乃ち彼口人の
漢子武松を見て云らるは漢子肉究て多く早く長兄の方小送しとて



武松屠殺
仇人血書白
壁





武松慶金
張都監
書

新編水滸畫傳卷之二十八

五



新編水滸畫傳卷之二十八

五

恰と羊と牽ぎて小武松を引て村中を馳來り。落すぐ口人齊しく云らる。這漢子一身に血の流るるを怖れられ多くは穢とまして初身を赤傷られに疑ひなりと。後て山口又里許り馳る如に。一豹の家屋の内に入て武松を引入乃ち燈の下にて武松が衣裳剥ぎ取て武松を亭の柱に絆り置て。口人お去に造化とて怖びたり。武松密に竈の辺に上り。梁の上小人の腰許に掛垂られ。武松心中に悲しく。我不孝うして這毒手に申つて死せんことを。我乃れ我老子に禍小遇ふこと知らず。孟州に於て自殺と遂名と後代小遺さんものと。今に知るて非命の死とまえて。辱しくも遺恨ありと。牙を咬齒と切るも。口人の漢子武松が包袱蘊とれて。寄望に呼り云らる。長兄阿嫂。おまご主婦と。早く來て我々が得寐と見交好と一疋の大牛と求て牽回りぬ。其時肉より一夢覺て。我少刻來んに且子と下して皮を剥とられ。武松

これとめて肉より養ふ。何若うゆやと思ひたる如にや。ぐて友人出来る。武松これとるに一人の女之友人齊しく云らる。是は武松の取まわらば。かの一人の漢子が云まに。是れが義才武松之子。解と云て口人の志に命じられ。武松これと怖れて。再び晴と定免彼友人の男女とるに。彼漢子の別菜園子張。妻は彼女ハ是母夜叉孫二娘之は。時彼口人の漢子張妻主婦が言と。彼大。小孫と忙り。武松を索と解て衣服を脱ぎ。別菜園の客廳小座に。座已に定り。張妻先大小孫を云らる。賢才。何由來かくの。血。小傑て。比辺小あり。あはれ。武松答へて。我今に解と。比辺小刻り。取ひむ。一。夢の言に。是れと。我寫に。長兄小別れ。孟州の死所。あり。張妻。張妻。又。子。張妻と。張妻。乃。老管。張妻。小管。張妻。姓名。令。眼。施。恩。と。云。施。恩。是。每日。好。肉。と。以。て。茶。と。款。待。し。か。も。怠。慢。の。こと。なり。施。恩。本。孟。州。城。

の舟は活標と云れ小一間の酒店と定て毎日毎月若干の金利せりるに張
雲練と云る向に孟州小どりし時蔣門神と云力士せりて来るるが。這蔣門
神己が豪強に倚て擅小施恩が酒肆を棄ひ紅施恩と散ぐ小おし由是施
恩示友府へ強んと欲しられ張雲練が威勢小怕れて松ありと能く流ら小
豚と嚙で忿りぬ故に柔施恩小代つて彼蔣門神とお散て再び酒肆を紅
復し施恩に与しし小施恩父子孫柔と敬せ款待ぬる由是柔も又心と安んじ
施恩と二雨に酒肆の内に住しる小蔣門神這仇と報んと欲して張雲練
小計を求め遂に張が監が方小施恩と送て柔と殺さんとと報りられむを紅絡
と恨んで報不應ト乃柔を招く己が家には重きと誘懐の神小めてたし某
人心と寛きゆ遂に詐の計と役け柔と後園の内に小嫌し八剎我と捕て絏
とみし翌日孟州府小送て我が命と害せんと斗りぬ紅絡は施恩父子多く紅

絡と上下の流役人へ送て柔を免れんとと求めぬる由是柔を牢の附もさめて
若も交りたり。これ又葉氏の孔目ありるが這人平生義と重んと材を輕小
おや人の禍ひを救さんと欲し。毛氏も私の非乃と行はざる由是紅絡柔が實の
罪小隔ると憐み再三府尹小告て遂に柔が命と救ひぬ且又康氏の爵級
わりるが柔來施恩と交り厚き由是紅絡柔を憐むを牢の中這人の情と
義のよし後し是らの仇と一命恙あり保てり。是見らの御けなく必ず牢中に於
て害せしめん焉とよく今日の命わらんや。既ろろろ六十日の限満る如に二十
杖策とれ流罪に格り如に張が監と蔣門神が居に計と役け是非柔
と死の乃とて害せんと欲し。乃ち蔣門神が威勢の勇子二人と馳。彼監押の
下友友人と力を合せ柔を小飛雲浦へ送て人全儀と定め己に子とし
我と殺さんとせし由是柔紅絡とめり。是を恨り乃ち友人の下友と水中に踢送

將門神が牙子五人各一刀に斬殺し再び又孟州城小回り。是に張監が後
 門より忍び入智塔楼小上り乃ち張監張固練將門神は三人と一時門内
 小斬殺し張監監夫人と初とて一家男女とぞ斬殺し。不迷城門を越
 ず。一時走り走りし如に梅齋再発しと禁じ強りしにより古廟の内小入り
 眠りし。這口人の寄釣索を以て我と搭住強に解ては如に玉わり糸縛り引
 ちりて初て眼碍て微小忙然と。あし良縁縁は料は長足小お遇ふと
 是利我が福の玉極と。已に淡下語りられ彼口人寄。忽ち地上に伏て
 云るハ糸小皆張大哥。敬の家人之頃日情変に輪て本張弓おる由。少
 残材と亦んと欲して。方くと尋繞りし如に於血淋々小入りて古廟の
 内小睡居有人と着着是得来たりと。悦び遂に釣索を以て伴めまわせり。
 糸糸を来下忠鄙嫉の後され。眼めりといはまの英雄と。傲ず。ありは神

と様し。ぬると今交罪と謝するに而は。如く初改廣く仁慈を垂り張を交
 歸歩笑て云るハ我が寄毎夜初改と。言る。さる由。何と申んむ。ふり。
 乃ち被審ふ命。ど。憐れ人と。刺さる。只活捉し。と。惟命と。言する。と。う。れ。再
 三林糸を。是。利。我。ら。又。奴。奴。ら。存。念。有。て。の。上。今。日。初。改。か。の。ど。く。綱
 と。繋。り。て。け。如。に。解。り。有。六。條。に。縛。り。又。奴。奴。小。懸。せ。り。我。松。比。時。か。の。口。人。の。若。に
 對して云るハ我を以て汝に捉れ。れ。を。以。如。小。玉。と。張。監。又。奴。に。ま。ま。由。と
 と。如。く。是。微。小。汝。ら。が。湯。之。汝。ら。既。小。情。変。小。輪。て。下。梢。下。し。と。う。ハ。我。今
 汝。に。如。し。の。銀。と。与。へ。ん。ま。下。梢。下。せ。と。乃。ち。十。兩。の。銀。と。與。出。し。て
 口人の寄。分ち与へん。は。被。審。大。に。悦。ん。て。解。れ。せ。り。張。監。これ。を。見。て。已。も。又。三
 兩。の。銀。と。與。出。し。口。人。の。若。に。与。へ。り。張。監。又。武。松。小。對。して。云。る。ハ。我。今。存。念。有
 と。云。ハ。我。老。早。初。改。の。必。ず。災。難。小。遭。く。は。辺。に。徘徊。し。ま。り。ん。と。ぞ。知。り。ぬ。は。

田舎に彼は人の客に命とて云々の汝途中にて人と剥奪も必ぎ性命せ
 害せざると活捕小せより一萬二豪傑の士にのめて敵とて能くせんが速來
 て我小若よ我を豪傑の士に見えて云事めりと示しぬ故にいんとなれば
 彼より初段に遇て初段と剥んとする時に人かきて至は十人となりて齊く
 敵一闘ふもいんをうく初段不敵せんや彼も彼も必ず逃回て我小若ん
 多時我急小能來てお見え豪傑の我初段も在るが速來て我
 や久不敵らんと有りし之初段に初段今日禍を蒙りぬいては辺に居りぬを
 是奇吳のあり初段り睡りて醒し吾も時をば初段に人か働むいんぞ
 よく捉るとわらん我ら支ぬ初段に初段の災難を蒙りぬいし初段知しハ
 初て是夏の凶に依ると今日上天良縁と假ひて吾び急か遇ぬること
 互の福い何事これ小若んや以時又孫二娘が云初段かくのぞく辛苦



張春之
 小賊捉武松

新編水滸畫傳卷之二十一

張吉夫婦

換武松
形容



と佳多いぬつてゐれば。定めて公方大い小疵れぬに先宜く客室へ入て。
歌より更だ明日高儀来しとて夫婦同く武松と延て客室に身其
夜各歌ミリン

○改訂者夜蜈蚣嶺小走

諸孟州城の張豹監が鋭る屍許多に方に横たひ。血流れて池に
ぬ。家人の内三人床の下に躲れ命と脱れ。客室に小更の時とて
門外に走り出大に叫ぶとて云らる。此夜武松と云老翁門の内を踏入て相公
夫人と始めるいふ一家の男女を斬殺し方に隣家の倉中早く集り
更と始りに叫ぶ。隣家は聲とて大に驚きしりも敢て一人も出ま
る。老翁は早くも曉に逃れ馳来りぬ。後漸く張豹監が手下の役人ども
於て追くに馳来り各は先承とて。只果れり許之已にして後人商儀

と定めて。府皆孟州の友府小松と松へら。府尹是とて大に
 驚さる。速人と馳て屍を査點させ。又役人小松命じて武松が形と写し
 多小身出さんと計りたり。新の如に彼強盜監が家小来と査照とす。其
 若た色に同て府尹小松一と詳に語りし中に。白壁小血とて書する八字
 と写し。府尹に写も。府尹に上てこれ殺人者お虎武松也と云字する
 由名。府尹益心と驚し。忙しく人殺と信し。緝捕の友に先偏僻
 の地と捜せり。翌日又飛雲浦の保正法の々人と引て。孟州城の友府小
 松へら。何志の亦なるおや。人の漢子と斬殺し水中に投ぎぬ。其
 血の痕此彼不残なり。是に依ておく。松へら。府尹是とて又一驚と加
 その日人と飛雲浦にき。人の屍と撈ひわけを乃らんと査し。其
 に手向友人の武松と押監し。下友へら。友人の屍首も各親に

あて姓名住居分明之府尹役人ホと高嶽して云々。武松殺十人の命
 と害し。其罪九族と滅せに當れり。尋ねたの公事とハ等し。其
 先宜しく城下の人家と捜す。其城門と實して内外人の出入ぬり
 とて。一連に三日城門と実を東西より南水小割り。只一字も遺さず。其
 源国幽室希庭後園於て捜さばと云知なり。びとと施恩父子ハ此事
 とて。武松が捉りぬんと恐れ多く金銀と強役人小送て。武松と走
 めんこととぞ教る。其府尹武松の城下をぎるとて。亦復武松が相貌
 振と写して。三子貫の賞錢とけ。法府に文書と下し。其威威の武松と
 尋ねたり。武松の張書が家小は又日運返し。其をる如小孟州の友府
 法方に文書と下し。三子貫の賞錢とけ。討文緊し。其をる如小孟州
 と下友ら多く来て。武松と尋ね捜せり。張書武松小討し

て云々の我柳の事と怕れてりふあつた。我今於此と留る事と出まらぬ。
 頃日孟州府の文書法州法縣小刻て村々里々千門第戸一徹不搜
 一緊しく於此と留る事と後日州縣の下友ホ付取に於て於此と搜
 出はすのハ般ひ我む後悔すも何の益ありん我ら夫婦於此と送て身
 せ安んじ命と立しめんずおめり。寫りも已に於此とすめ送んと欲せしを
 於此肯て往來さる。今事危急不及し。於此出てかの地に往らんと計
 松が云来も日定て事奔んと察し。何れの方にたよりを渡りんと計
 ぬれ普天の下才と容んばる。急ぎ兄我と送て身命と安んずめめ示
 わる。急に送る。我いんぞ嫌ふとめらんや。張馬が云我向も流
 とく孟州府の支死地。二竜山宝珠寺小苑和尚普智深喜面獸揚志と
 共に山陣をもちて強盜の政於とる。今もうち家と歩合と初めて猛威を

遠近小振ひ孟州府の友軍小進り彼友人と怕れざるや。於此と破山陣小
 入る。我久禍いと免れぬ。身命と安んずるに足ぬ。若他不
 越さる久しして後必も得ぬ。普智深者小高骨とあり。我と山陣小
 振けども我斬里と割りに思ひし。未だも振さ小夜せ。我今一通の書簡と
 修へ具し。於此の武藝と吹嘘し。我いんに。何ぞ於此と留るんや。於此
 り。彼不も於此と留る。般ひ友府より子軍万と奔りて。あ来る。豈
 よく於此と捕る事とせ。何んや。何んぞ急と交して。彼不小振さ。或武松が云我
 久し。高世の清くさる。根とて。深山幽谷も身を隠さんと欲する。且若
 黄りんと。以て。未だ。時。今日に推移りぬ。幸ひ這次人を殺して事
 已に奔りられ。宜し。は。後機小察して。二竜山に登り。普智深ホと豪傑と
 る。ま。浮世の御。何事と。是。小。長。兄。宜し。く。書。骨。と。修。我。と。勤。め。我。外

我今日の内小茶豆すぞ。張喜大不眠。即時に一封の書札を傳へて。武松が
 始終の來歴一々詳にお述べ。武松ふれと附し。大に酒食を具へ列れの
 酒宴を催し。は時母夜叉。孫二娘。張喜に對して云。は。丈夫のうんぞ。這等
 の粹にて。叔と送らぬんや。孫叔くは。解を往ら。必定茶面小於て。活捉れ
 らふへ。武松云。嫂の云。は。不。解の曉。は。は。は。解を往ら。必定活捉れん
 ぞ。ぞ。若。不。存。め。は。速に。解り。孫二娘。が。今。友。府。より。叔。の。形。を。写。し。て
 布。に。然。乃。ち。三。子。貫。の。賞。錢。を。出。し。偏。く。村。に。里。に。觸。て。叔。と。搜。し。心。解。く
 の。面。に。金。印。の。刺。を。明。く。し。孫。茶。面。小。の。ひ。る。は。乃。人。必。ず。叔。と。張。喜。で
 捉。ふ。へ。を。耐。美。ぞ。よく。能。抵。難。め。ん。や。は。由。來。に。殆。ど。懸。さ。ぬ。め。り。と。は。張。喜
 これぞ。呵。く。と。お。笑。ひ。て。云。面上の。金。印。を。友。茶。の。膏。茶。を。貼。は。人の。眼。目。を。誰
 く。足。ん。何。ぞ。金。印。の。と。怕。れ。て。か。く。の。と。く。言。と。莫。大。不。眠。や。孫。二。娘。これと

笑て。何。と。く。お。笑。ひ。て。云。丈夫の。言。は。独。り。自。ら。の。之。聰明。と。て。天下の。人。の。皆。癡
 愚。と。す。に。似。たり。豈。と。く。這。等。の。後。く。と。計。を。以。て。眼。明。く。する。下。友。ら。と。誰
 に。足。ん。や。我。却。て。一。ツの。計。り。只。怕。ら。ぬ。叔。と。送。ら。ぬ。後。ひ。を。ま。き。と。て。武。松。が
 云。我。今。一。味。に。災。難。難。と。脱。れ。ん。と。その。勢。ふ。何。ぞ。敢。て。良。計。に。背。ん。や
 叔。く。は。嫂。と。速。に。計。を。示。し。孫。二。娘。大。に。笑。て。云。叔。と。必。ず。我。計。を。以。て
 怪。と。め。や。と。する。れ。儲。計。と。い。は。い。ん。と。な。れ。二。年。以。前。一。人。の。既。陀。此。れ。と。さ。う
 て。我。店。小。五。倍。し。由。來。彼。蒙。汗。茶。を。用。て。これ。を。殺。し。乃。ち。包。袱。蓋。木。を
 奪。ひ。て。肉。の。包。小。做。ぬ。ま。時。彼。既。陀。が。著。せ。一。錠。の。衣。張。一。枚
 の。壺。綴。今日。本。小。十。倍。并。に。一。本。の。皮。牒。一。連。の。珠。數。一。腰。の。戒。力。あり。這。刀。い。ち
 ろ。る。名。也。身。が。ち。や。又。多。く。人。を。斬。し。た。り。毎。夜。三。更。の。時。小。鳴。り。て。自。ら。鳴
 嘯。の。聲。さ。り。豈。希。有。の。宝。刀。に。わ。ら。ぬ。叔。と。既。不。疑。と。通。人。を。遣。は。必。ず

髪を剪んで既陀の形小なりぬい宮くり若の模範に歩扮て髪を垂て
 面上の金巾を遮り髪一丈尚且は度牒を携て一生の護身とて是れ
 前世の因縁とて此かの既陀が年甲相貌おくと等しくられを法名も
 又度牒の表をばひて彼既陀が法名を引ひて是れ一生金と計るべ
 や張妻をばひて忽ち掌を鼓て云らる我妻が計何の神妙は是れ小
 我却てこれと忘れり只知れば既陀と成るべとや武松が云
 是何様ふ所りわらん咄眼く我形出家の模範に懸ずと張妻が云
 我まづ此の爲小粧いと調へて徳ん我が妻ふく巻襦を拿まれば時
 孫二娘房間の内より彼包袱蘊を取出し件多の衣裳と武松と交へ
 て着せり乃ち髪を剪て金巾の上に置られ果して金印少も見え
 たりたり武松大いに喜んで自ら巻襦と把衣裳の上に懸り又珠釧と把て

頭小くけ彼戒刀と巻襦の下小帯し粧ひ已小整りし孫二娘再三懐嘆し
 て云らる然に及び此傍形あり是とみて前世の因縁や初り又は時武松
 自ら鏡を照して己が形を見忽ち絶倒て扱く微小好き一筆のり若う
 ろと云られ張妻も口く何何と歩笑て云らる僧形旁若無識うると
 懐嘆し乃ち武松は事已に危きを成してと云棄置せしと告ぐべ
 張妻主婦も物りと口く乃洒富を役けて武松を款待し又儀として
 一錠の銀と武松に送り盃已に收りられ武松已に十日旅装いと調へて
 包袱蘊と背小負已に張妻主婦に辞して別れせ若し知れ孫二娘
 度牒と取出して武松に与へ互に依りて暗に涙を含みり張妻
 又再三武松小示して云らる賢才道中に出るひるば自らぬい意と
 若く薄情と必ず天洒小及んで大事と張ゆと云れ附小出家の約

乃ハ慈悲と申して柔和忍辱なるはさきのめい。能ひ何等の分るべきとありとも。
 能く思ひ候も人と争ひ候ふるふとあり。已に二竜山小よりあり。又
 不く書簡と寄て消息と毎ド之我即今以知に在て管とるはと以とも。
 是すも長久の計にのぞけ。家業と止て我ホ夫婦も共に二竜山小より再び於
 既と碑と交て築まんる。宜しく魯智深楊志小言と傳へ。或松是
 と呼て云々の我自ら肯て仍仍と律法。一長兄はま。これと憂ふとあり。
 且不く家業と止て速小二竜山小より我中。長兄嫂くの東條と疾し
 とて遂小別れて門外に馳出られ。張妻夫婦も共に走り出て遂に送る。扱
 武乃老ハ張妻夫婦小祥して大樹十字坡と馳走。亦ち二竜山と早ん
 でを奔れば。時十月の天来。小て日ま。短く。只一瞬間に晚小向とい。
 武乃者已に五十里より往し。知に。や紅日沈んで月及漸く明く。

武乃老。水面とるに。ツの言。成りし。乃ち月の明く。乃ち。と。馳上り
 已小。上小。至て。何方と。顧み。微小。嶮し。さ言。成り。武乃老。遂に。蕭と。早
 んで。り。往。知に。林の。内。に。忽ち。人の。笑。み。成り。乃ち。武乃老。是を。呼て。忠
 道。性。や。けの。ど。と。蕩。く。る。言。成り。不。何。も。あり。かく。笑。と。律。法。も。必。定。蹊。蹊
 め。う。ん。と。も。已に。林の。辺。に。至て。以。知。と。伺。ひ。も。る。に。亦。以。林。ツの。墓。小。添。て。一。字
 の。墓。庵。あり。庵の。窓。より。ある。人の。男女。露。れ。一。武乃老。何。も。あり。と。近。く
 着。んで。これ。と。見。る。一。人の。先生。一。人の。女。と。携。て。月。と。賞。し。戯。と。弄。し。て
 笑。ひ。り。武乃老。是。と。見。て。中。ま。あ。ら。ん。と。念。り。を。發。し。以。座。へ。り。や。清。淨。潔。白
 の。地。を。る。べき。に。彼。事。何。ぞ。かく。の。ど。と。様。と。る。や。我。先。彼。ホ。と。殺。し。て。慰。ん
 と。て。別。ち。彼。戒。刀。と。引。抜。ち。不。持。自。ら。月。光。の。下。不。透。し。戒。刀。と。見。て。云。々。の。い
 女。我。が。手。に。来。り。来。と。使。さ。と。に。遇。び。我。今。然。に。彼。戒。刀。を。以。斬。害。女。と

武松於
蜈蚣嶺
斬賊
道人



祭るべしとて再び先鞘の月小狛め被重祓の神と把てて巻上巻に居の
糸にぬらうとて敲きられ彼先生は書きさめて壯しく窓の戸を戻して
躲れり。武乃志又一つの石と拾ひきて頻りに門を敲きし。肉より一人
の道童走り出て門を閉ぢり武乃志と罵ていさく汝何奴をいひんぞ
半後三丈に門を敲て我が庭を鬧がしむや。武乃志眼を睜み六ひに
怒り吼つて云らる。汝賊を重めく我と教くや。我は汝と斬く刀と奈んんと
遂に戒刀を揮くるまき頭を割る。只一歩ありと喊ぶ。あひなげに武乃志
小落舞ひ傍小倒しけり。彼先生因うこれと云う。初ち武乃志と大ひ
小罵りつて云らる。汝賊はへんぞ我を重と教く。と云ふと遂に利劍
を引く。武乃志斬ておりにく。武乃志とれと云う。大ひおろしひ。その
汝と殘れまじき。お汝劍と漏してあるの付く死と云ふ。と云ふと戒刀と

揮くお途へ互に猛威と勵し刀と文戦を小十指合お及し知れ武乃志は
て五ひ歩許進じう。彼先生勢ひ小あつて斬へし。武乃志閃りと避れ
て戒刀を奪ち先生が首の割らる。武乃志先生の人のや次の巻をて知り
け巻小云。貴錢と八屬託之よむ。小音使小て。と云ふとよむ。と云ふと放火
人と捉へ來る。廢兵として幾くの銀を取ずと許多の人民に廣く
知らしめん。市中人足驚き。おれと建並をと別是之廢兵にをば銀小て
三子貴文の錢と与へんとおれの貴錢の文字とそくそくと傳せし。け於義
列と云ふ。之道童と道士の使童と或人編して云け書武編目に宋江編
婆惜との事に。閻老婆婆唐牛兒の淨備あり。け編潘金蓮西門慶との事に
王婆鄆哥の淨備あり。幸吳るれも趣向二つ之他者別に工夫をせし
り。又武松が侍と偏して。兄武大郎の仇と復する。武松が身小保りてハむ

守死するれを兄の喪小遇て友府を恨み知縣の弟小を兄の死骨と懐
 一聽希に出征見こも知縣に見せ或ハ奸夫淫婦と斬首と刎髪と
 結合せ擧げ来て塔下小並公と縁を恨み孟州へ流罪の終乃十字
 坡小張妻が家に逗留し兄才の約を恨みなど保養持散の旅のこ
 け時張妻が後話小我々夫婦の當旅人と欺き殺し衣類を剥ぎ殺せ
 人肉と牛肉と偽肉包と刺し賈物と店小入来れも殺さるもの
 あり僧侶と殺さる娼妓の類と殺さる流人を殺さる而して武松多く
 人を殺し張青が宅小して行者の擧振小我々を愛宝珠寺へ落し小條で
 線二娘が月に二年以前一人の院陀店に入来る由名流汗茶の酒を用ひて
 殺し其肉へ饅頭小做衣類と携へ来り弟の死を恨み衣類を剥ぎ珠
 戒刀の類と武松小とへ旅籠ひと取りて僧を殺さる言ハ出傍

魁の虚云と夢也又小事とめられ張於監が八月十八夜月の宴とあり
 武松と捉へん計に瓮と正中に出し暗に武松と倒れと大勢
 ころ丸押へ郷るとめられ比の月の曉までへ恨み木小躓く後の雪夜に
 又比於るさ豪傑とて用振る殺威指と好で策れんとて重む程也
 玄実の罪小陷自ら覚るさ抖と引信白状して悔を赦されんと乞ふも豪
 傑の魂をうけ又睡て生捉るさ幾もくの人とも踢殺をかり足のも
 別力小して凡この口人小牽れ張妻が宅小あるもせめくと玄甲變り
 妻が怒りハ一度来て逗留し人と宰不とも見盡さる小何事へ引來れ
 辨き祥も不實又初と決めて後で別て美端と詳帳柔和君辱
 第一の者張妻も誹りちう身も納めし別れ方乃もなく蜈蚣が小
 て先生と道童と斬是るの者名も殺し功あるもせよ身は干らぬ事

あれは世と忍び落り陀戯小人と斬との張きが源切と云小するも是又
英雄豪傑の志小の心と忍辨して云水滸傳の書ハ支那俗間の牌史
るん理端と容不足以奇蹟小文義を加へ画小虚事あり和漢一ツ之
譬ハ今日の兒女の弄ぶ系双紙佐小續後入のよみ本をどと見てそ
事の虚実と儀端一と顔と辨駁する者いまどわらび二編目の首巻緒
言小演ると狂言綺語ハ穿小豎へて

新編水滸画傳卷之二十八 畢

此新編水滸傳甚か

誇人狂心

二所中なる事ありて之

東邊場所ハ浪衣鳥又ハ例

日輝作馬 昌瑞筆以印

傳白

